

## 書評

### 東南アジア社会の深層

浅沼信爾  
一橋大学客員教授

Michael Vatikiotis, *Blood and Silk: Power and Conflict in Modern Southeast Asia*, Weidenfeld and Nicolson, 2017

著者はもう何年か前に廃刊になったファー・イースト・エコノミック・レビュー(FEER, Far East Economic Review)の元記者。ロンドン大学卒業後東南アジアに来て40年以上東南アジアの国々に住み、権力層から市井の人たちまで広くつながりを持ち、そしてこれらの国々のことを考えて書いてきた。わたくしは、1960年半ばからアジアに出入りしてきたが住んだことはない。今ではアジアのニュースは世界の主要な新聞やテレビでリアル・タイムで報道されるが、昔は現地にいない限りニュースは入ってこなかった。そんな時にアジアに根を張った FEER の週刊誌は本当に貴重な情報源だった。ニュースと同時に掘り下げた特派員の追跡調査は他のニュースソースからは得られないものがあった。

本書はそのようなジャーナリストの手になる「東南アジアとはいったい何者なのか」という疑問に対する40年余の思索と回想の印象記的なエッセイだ。今日東南アジアというと、人は一特に西欧の人たちは一エキゾチックな社会と躍動する経済を思い浮かべる。いわば光の部分だ。しかし、影の部分をおぼろげにはゆかない。特に長く東南アジアに関わってきた者は、第二次世界大戦後にインドネシア、タイ、フィリピン、マレーシア、カンボジア、ミャンマー、ベトナムで起こった数々の紛争、暴動、蜂起、抑圧の歴史的事件を克明に記憶している。だから、一見平和と繁栄に彩られた東南アジア社会の深層には今でも何か社会の激動を引き起こすような血塗られた歴史の原動力になったマグマがたまっていて、それが何かの拍子に噴き出すかも知れないという漠然とした不安と怖れを持っている。

本書のタイトル「血と絹」はこの二面性を現わしている。「絹」は東南アジアの持つ富と蠱惑の象徴だ。しかし、その前に置かれた「血」がその裏に隠れているおぞましい影をあぶりだしている。著者は、東南アジアのローマの双面神ヤーヌスのような矛盾した側面が併存する社会は「気弱なロマンティック(faint-hearted romantic)」には耐えられない実に荒々しい場所だと言っている。東南アジアは、大航海時代以前から近隣の大国の覇権争いと貿易商人のプレイグラウンドだった。アラブ、インド、中国の足跡があらゆるところにある。大航海時代以降はポルトガル、オランダ、英国、それに最後には日本までが入り込んで狼藉の限りを尽くした。そして、第二次世界大戦後は熾烈な冷戦のステージになった。東南アジアは外国の軍隊と商人と移民でごった返す所と運命づけられていたのだ。それらの国々を征服し治めていたのは神から王権を授かった王たちとその周りで権力を狙う邪悪な魔王たちだった(“Divine Kings and Dark Princes”)。

このような特有の「地理と歴史」の重荷を負う東南アジアの国々に出来上がった社会と国家の特長は、まず何といても支配者層であるエリート集団のエゴイズムだ。統治の基本概念は家産主義（Patronage）で、法治ではなく人治だ。したがって、エリートの意識の中に人民の人権や自由が存在するかどうかは疑問だ。闘争の歴史は支配者の中の覇権争いで人民は蚊帳の外に置かれると同時に踏みにじられる。人民の命はおそろしく軽い。いわば象に踏みにじられる下生えの草だ（“Elephants and Long Grass”）。過去に政治家たちの扇動で起こった殺戮もエリートに都合が悪ければ「過ぎ去った過去のこととして忘れられる（“Bygones be Bygone”）」。クメール・ルージュは語られることなく、東ティモールで起こったことの張本人のインドネシアの元軍人は大政治家になっている。もともと 1965 年の 30 万人が謀殺されたと言われるインドネシアの反共産党暴動すらいまだ闇に葬られている。

もちろん、東南アジアに政治的「進歩」がなかったわけではない。自由主義や民主主義のための運動や闘争はあった。また、政治学者が「民主主義の第三の波（Third Wave of Democratization）」と呼ぶ 1970 年代の世界的な潮流の流れに沿って民主化運動が起こり、1980—1990 年代東南アジアでもマルコスが倒れ、ミャンマーに開放の動きが出てき、アジア危機に際してはスハルト政権が姿を消した。1990 年代は総じて政治的には改革と変革の時代だった。しかし、21 世紀に入ってから 20 年間は逆行あるいは退行の傾向がみられる。一つだけ例を挙げるとすれば、今フィリピンで起こっていることだ。一般国民の進歩にエリートが抵抗を示すという二つの力のせめぎ合いが「一歩前進二歩後退」現象を引き起こしている。結果として、東南アジアの国々の政治体制は「生煮えの民主主義もどき（demi-democracy）」だ。そこでは、エリートの強欲や腐敗やおぞましい行いがまかり通っている（“Greed, Graft and Gore”）。

東南アジアは外から内から覇権や交易を求める勢力が往来する「風が渦巻く地（“Land Below the Winds”）」だ。そこでは第二次世界大戦後だけとってみても、記録的な数の反乱や内戦、いわゆる「小さな戦争」が起こってきたし、今も起こっている。ほとんどが少数民族問題に絡んだアイデンティティの政治闘争だ。ミャンマーの国境に接する民族紛争、タイ南部のイスラム・マレーの反乱、ミンダナオのイスラム・グループの反乱等々がそれだ。これらの内紛はこれらの国々の辺境の日常生活にさえなっている。歴史的にこの地の征服者たちは国を造る際に、多民族・多文化社会を意識して間接統治や分割統治（divide and rule）、あるいはまた黙認・無視の政策をとってきた。しかし、第二次世界大戦後の脱植民地化と独立を成し遂げた政府は、近代国家の建設の過程で中央集権化を推し進めた。多民族・多文化国家の建設のためには地方分権や地方自治にもっと注意深く気を配るべきだったのにも拘わらず中央集権的近代国家の建設を急いだのだ。その結果が今日の数多くのしかも終わりのない「小さな戦争」の現実だ。

歴史を見る限り、東南アジアは直線的な発展を遂げてきたわけではない。それこそ「行きつ戻りつ」の歴史過程だった。そして今東南アジア諸国の将来を見通してみると、どの国を取ってみてもはっきりした方向性が見えないというのが正直なところだ。ただ、

次のことだけは言える。どの国でも社会の中に寛容性や包摂性がなくなりつつあるのではないかという心配だ。経済社会の発展に従って国民の宗教的な関心が増えている。特にイスラム教徒の間に、だ。それを政争の具にする政治家が出てくる。スハルト時代の後期から現在のジャカルタの市長選挙戦までのインドネシアの国内政治の展開をみれば明らかだ。また、地域の外からは中国の大国としての台頭に伴って国際政治的な覇権争いの影響が強くなる。東南アジアは、また大国の国際政治のプレイグラウンドになっているのだ。

これが、「東南アジアとは何か、どこに行くのか」という問いに対する著者の答えだ。このように彼のエッセイを要約すると、「血と絹」の暗い面ばかりが強調されているような印象を受けるが、著者が歴史や自身の経験を交えて語る東南アジア物語は、実は彼のこれらの国々に対する深い愛情がその根底に流れている。それがこの「血と絹」の物語の救いになっている。それにしても、政治ジャーナリストは因果な商売だと思う。権力の中核に近づくと否が応でも生の欲望の醜悪さを見せつけられるからだ。しかし、良い統治も悪い統治もそのようなドロドロした渦から生まれる。だから醜悪さから目をそらさず、それを超越して政治の結末を見届ける必要がある。東南アジアを愛するこのイギリス人ジャーナリストは、そのような強い気持ちをもって歴史と政治を語っているように感じられる。